非核の政府を求める大阪の会ニュース

第224号　2024年11月1日

発行　非核の政府を求める大阪の会　豊島 達哉　梅田 章二
〒542-0012 大阪市中央区谷町 7-3-4（新谷町第3ビル 210 号）
TEL.06（6765）3032　FAX.06（6765）3033
URL・https://hikaku-osaka.jp/
E-mail・hikaku-osaka1986@kind.ocn.ne.jp
hikakuosaka@hotmail.com

戦争と核破局か、平和・安全と非核か
被爆者、若い世代とともに
「核なき世界」へ

▲被爆者と一緒に描いた「原爆絵」を前にお話しを聞く

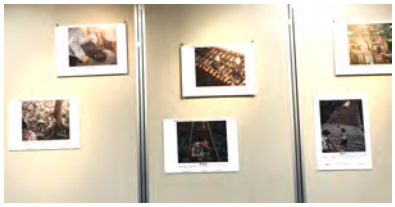
非核の政府を求める大阪の会は、9月26日大阪原水協が開催した「非核日本キャンペーン運動交流会」に参加しました。その運動のとりくみのなかで若い世代への被爆の継承を重視してきました。新婦人大阪のとりくみを紹介します。

広島の高校生が描いた「原爆の絵」展が広げた「平和」づくりの輪

新婦人大阪府本部　秋元真由美

新婦人大阪府本部は、広島市立基町高校の生徒が被爆者の証言をもとに一緒に描きあげた「原爆の絵」展を各地で取り組んできました。高校生が被爆者の思いを受け継ぎ、平和の尊さについて考えることを目的としているように、「原爆の絵」展は参加者の心をも揺り動かしています。お互いの思いに寄り添い、1年間に及び直しと確認を繰り返しながらリアルに完成させる被爆者と高校生の共同作品だからこそ、核兵器の非人道性を訴える力をもつ「原爆の絵」になるのだと実感します。

新婦人がおこなった114か所の展示会での出会いは、被爆の実相を知り、ヒロシマ・ナガサキへ思いを馳せ、3度繰り返させてはならないの決意となり「日本政府に核兵器禁止条約に参加を求める」署名をする機会にもなっています。



「原爆の絵」展（エルおおさか）

唯一の戦争被爆国である日本が、条約に批准していないことに驚く参加者。感想の多くは「高校生の絵とコメントにすごく心が動いた」「原爆の悲惨さをリアルに感じた。気づかされることが多く心が震えた」など圧巻です。署名へのサインは、被爆者と高校生の呼びかけが響き合った瞬間です。

また、「怖いから悲しい・つらいという感情に変わった。戦争は利益をうまない愚かな行為早く止めるべき（大学生）」「今も戦争を止められないでいる中で戦争の悲惨さを風化させない、訴え続けていく大切さを心に刻みました」など、平和への思いが広がりました。

強い国を強調し軍拡や「核共有」を軽々しく言い、戦後多くの国民が希望とした憲法の改悪に前のめりになる新政権を続けさせるわけにはいきません。自民党政治を終わらせるために、今こそ声を上げるときです。

「原爆の絵展」次世代との出会いもつくり、「選挙カフェ」で大いにおしゃべりが広がっています。世界大会に参加した次世代が、「1発でも使われると人類の滅亡につながる。大会で得たことを多くの人に伝え、行動し、広めていきたい」と感想を寄せました。核兵器禁止条約に参加する政府に変える選挙に次世代と広げていきます。

【非核五項目】

①全人類共通課題
②国際通貨
③日本国憲法
④国家補償
⑤原水爆禁止

すべてを国際連合に帯意する
ことの強化

シリーズ大阪における国民平和大行進

1982年の平和行進…共同行動の原則が鋭く問われた平和行進（7.3-7）

世界平和行進「其の時が来た」に連帯し、第二回国連軍縮特別総会を成功させ、1982年原水爆禁止世界大会を支持する。

日本国民平和大行進

東京5.8 → 広島8.5

主催：日本山妙法寺
協賛：1982年原水爆禁止世界大会準備委員会

平和行進に二参加のおすすめ

日本山妙法寺

８２年は、昨年までとは異なって、日本山妙法寺の主催で実施されることになりました。平和行進大阪実行委員会は、日本山妙法寺と協議を重ねた結果、府下における今年の行進を、日本山妙法寺主催のもとに、二つの主要コースを設けて同時並行的に実施することになりました。実行委員会が中心となって実施するコースと、大阪総評等が中心となって実施するコースです。

８２年の国際情勢は、米ソの核軍拡競争の激化のなかで核戦争の危険が強まり、日本が核戦場にされようとしていました。米日支配層は、軍事費の飛躍的拡大、非核三原則の「二原則化」、８３年の衆院選挙で改憲勢力の三分の二などをすすめようと画策していました。核戦争か平和かの対決は決定的な段階を迎えていました。

８２年国民平和大行進は、国連と政府に要請する「三千万国民署名」運動、世界平和大行進をはじめ第二回国連軍縮特別総会に結集する内外の運動と連帯し、８２年世界大会にむけて国民運動として大きく成功させることがもとめられていました。

８２年３月、８２年世界大会準備委員会発足直後、準備委員会の会議の中で日本山妙法寺代表より、平和行進も従来の「原水協・平和行進実行委員会」主催をあらためて、より広範な参加を期するため、「８２年世界大会準備委員会」の主催にすべきとの提起が行われ、論議となりました。この提起に「原水協・平和行進実行委員会」側は、①平和行進は長期にわたる行動であること②各県の状況も多様であること③現状では「世界大会準備委員会」主催とすることは無理である、ことを理由に不賛成との態度を表明しました。論議の末、地婦連の提案により８２年平和行進は、日本山妙法寺主催、「８２年準備委員会」協賛の形で実施することに決定しました。大阪原水協・平和行進実行委員会は、この決定に対して、１団体主催にしたこと、なぜ「三原則で一致するなら平和行進を８２年準備委員会主催とする」との態度をとれなかったのか、なぜ「三原則で一致できなければ従来通り原水協・平和行進実行委員会主催で実施する」との態度を貫けなかったのか、との指摘を行いました。５月８日の東京出発直前に、日本山妙法寺主催、８２年世界大会準備委員会協賛ということで行われることになり、国民平和大行進中央実行委員会は、平和行進の過渡的な発展過程として今年度の平和行進に可能なかぎり積極的に参加・協力することになりました。これら一連の経過についての国民平和大行進中央実行委員会はその総括で『平和行進実行委員会』（４／３０発足）は、主催者である日本山妙法寺との間で、東京―広島間における「平和行進実行委員会」の独自行動の尊重や、暴力集団の参加を認めないことなどを確認し、実行にはいりました。しかし、「五・二三東京行動」や「ビザ拒否問題」等の闘争とも重なって、関西地方での行進等に事前に十分対応していくことができない事態が生まれ、行進コース、団体旗、カンパ等の行進組織上に問題を残すこととなりました。」と述べています。大阪では５月７日、国民平和大行進大阪実行委員会を再開し、今年の府下の行進を中央でまとめられてきた日程・コースで行うことを確認し、大阪の日本山妙法寺も５月１１日、大阪実行委員会の方向ですすめることを了承しました。翌１２日、大阪軍縮協は日本山妙法寺が中心となって各団体を集めるよう要請しましたが、日本山妙法寺は大阪原水協に一任したことを表明。５月２７日、日本山妙法寺が大阪の妙法寺に強い指導・助言、その日の午後、日本山妙法寺（本部）と大阪原水協（玉垣）が電話でやりとり。その中で軍縮協の和田氏から日本山の作ったコースでとの要請、大阪原水協はこれをたたき台にして軌道修正することにはやぶさかでないことを表明。その後、主催者としての中央の日本山妙法寺の意向により６月２日、「関西地区打ち合わせ会」が開かれ、あらためて日本山妙法寺案として別途の日程、コースが提案されるに至りました。この席上で、大阪原水協の代表は日本山妙法寺の尽力に敬意を表しながら、平和行進における課題とスローガン及び共同行動の原則について、方針を明確にするように求めました。しかし、この会議の席上では共同行動の原則について暴力集団排除問題をめぐって確認されるに至らなかったため、大阪原水協は態度を保留し、態度決定は翌日に行う旨を明らかにして会議は終了しました。翌６月３日、緊急大阪実行委員会を開催し検討した結果、①共同行動の原則はまげられない②今年の平和行進については日本山妙法寺主催で行われることになった状況をふまえて、大阪では日本山妙法寺提案のコースと大阪実行委員会コースの二つのコースで「同時網の目

行進」として進めるとの結論に達しました。日本山妙法寺もその方向で了承しました。ただし、団体旗は掲げないが、課題を訴えるプラカード・ゼッケンはよいなどが確認されました。大阪の平和大行進の日程・コースは以下の通りです。

Aコースが府下通し行進、Bコースは泉州コース、Cコース・Dコースは大阪市内コースです。7月3日奈良からの引継ぎは、近鉄国分でおこなわれ、柏原市役所、八尾市役所を経て東大阪市役所のコースです。八尾では市役所玄関前で6月30日から7月3日まで原爆パネル展を開催、「にんげんをかえせ」「予言」などの10フィート運動の映画を上映しました。

7月4日は河内長野市役所から富田林（湯茶の接待）、羽曳野、藤井寺、松原市役所のコースです。各市役所前での接待をうけました。7月5日は東大阪市の各支所を回って今里を経由し府庁に到着するコースです。この日は30度をこえる真夏日。休憩地となった東成区役所前では新婦人東成支部の人たちが行進団に冷茶のサービス。5日Bコースの和泉市役所から堺市役所の行進は暑い中250名の行進でした。

▲冷茶で一休み（富田林）

▲堺市にむかう行進団（堺平和を守る会20周年記念集）

7月6日のAコースは住吉区・府立病院前から大手前公園を経て守口市役所です。このコースに参加された大阪市原爆被害者の会「婦人のつどい」のメンバー5人は、昨年亡くなった方の遺影を抱いて行進しました。事務局長の高木静子さんは「年ごとに亡くなっていきますが、生きている限り核兵器廃絶を訴え続けます」と語りました。

遺影を抱いて行進する被爆者

6日Cコースは西淀川区役所から守口市役所までのコースです。淀川准看護学校の学生たちの明るい歌声を響かせながらの行進は参加者を元気づけました。

7月7日Aコース（北河内コース）は、七夕にちなんで大型の笹の葉がでてきました。寝屋川市教組青年部が準備したもので、「核のない平和な世界を」「子どもらに明るい未来を」などの願いをこめた短冊が沿道のみなさんの目を引きました。

林喜彦氏（大阪平和会長代行：当時）を先頭に大阪市内を行進（7.6）「とべよ鳩よ」より掲載

82年の国民平和大行進は、日本山妙法寺主催という状況のもとで、いち早く国民平和大行進大阪実行委員会が再開し準備をすすめてきました。大阪では、平和行進実施にあたって日本山妙法寺に対して課題、スローガンおよび共同行動の原則についての方針を明確にするように求めてきました。ところが共同行動の原則について同意できませんでした。このため、日本山妙法寺主催で「二つの網の目行進」を提案し、実施されました。

82年の国民平和大行進は大きく成功させました。大阪実行委員会に参加する団体が、複雑な状況に一致し対処したことです。この点で大阪統一労組懇の果たした役割は大きいものでした。また「大阪市民生協平和連絡会」（五市民生協）の皆さんとの共同が進み、成功の大きな役割をはたしました。団体旗を掲げないという今後の平和行進に大きな課題を残しましたが、各団体・地域は創意ある取り組みを行い、府民への効果的な訴えをおこなうことができました。

▲先頭幕を掲げる新宮理事長（大阪市内を行進 7.6）

『「黒い雨」訴訟』集英社新書（小山美砂著）

本書の帯に端的に著者のねらいが紹介されています。

「原爆投下直後、広島に降った『黒い雨』。多くの人がその放射能を帯びた雨による深刻な健康被害に苦しめられていながら、『被爆者』と認めて救済する制度はなかった。雨を浴びた住民らは国に援護を求めて訴訟提起したが、解決までの道のりは長く険しいものだっ

た。なぜ、国は黒い雨被爆者を切り捨てたのか―。

本書は当事者の歩みをたどるとともに、米軍の被害軽視に追従した国の怠慢、非科学的な態度をあぶり出していく。戦後七〇年以上を経て、ようやく語られ始めた真実の数々。『黒い雨』による被ばく問題、その訴訟の全容を記録した初めてのノンフィクション。」と。

序章、全5章、終章の構成です。「序章」の表題には「終わらない戦後」と題されています。本書が丹念に戦後から取材したことがわかります。「1章」は“降らなかった黒い雨”では「消された証言」、「隠された気象台調査」などアメリカの占領政策（残留放射の否定・軽視）にそったことが記述されます。

「2章」は「選別される被爆者」では、「被爆者」援護が開始されるなかで選別される被爆者の問題点が明らかになってきます。「3章」は「雨が『卵形』に降るか！」との謎かけのような表題、被爆四〇年の1985年原水爆禁止世界大会での議論から「広島県『黒い雨・自宅看護』原爆被害者の会連絡協議会」（1978年結成）と増田善信氏（気象学者）ら科学者との協力関係ができた経緯など興味深く紹介されています。

「4章」は、「黒い雨」訴訟の表題で、法廷闘争の詳細が描かれています。原告側の訴え、国側の主張が整理されて紹介。

「5章」「私たちは、嘘はつけない」では、二〇二〇年七月二九日、広島地裁勝訴の様子から書き出され、国の控訴、控訴棄却、国側の上告断念が描かれています。そして、「終章」「切り捨てられる被ばく」では、原告勝訴で終わった「黒い雨」訴訟ですが、政府は黒い雨被ばくの「本質」を否定したことを指摘します。それは、「内部被ばく」問題です。首相談話（菅義偉）という形式で、「科学的な線量推計」論にあくまでも固執しています。

今後、長崎そして福島、そして世界中に置き捨てられた被ばく者への援護・救済の闘いの一助となる書籍です。巻末には学習の手助けになる参考文献が網羅されています。

著者は毎日新聞記者です。100人近い人への取材を通して被爆者援護の課題を発信している若手のジャーナリストです。（現在は、フリージャーナリストとして活動）

集英社新書・定価1056円

2024年意見広告ポスター

核兵器が国際法によって違法化されたにもかかわらず、ロシア政府は核兵器威嚇を繰り返し、ウクライナ侵略も止められる兆しすらありません。米国もまたパレスチナ・ガザ地区への攻撃ではイスラエルを擁護し、未臨界核実験の実施など核戦力を見せつける危険な動きを強めています。日本政府は、こうした米国の核戦略に追随し、核兵器禁止条約第２回締約国会議へのオブザーバー参加も拒否、核兵器廃絶を求める被爆者や世界の圧倒的多数の人々の声に背を向け、核兵器廃絶を永遠に先送りする立場をとり続けています。唯一の戦争被爆国であり憲法９条を持つ国として決して許されません。そのような中でも昨年開催された核兵器禁止条約第２回締約国会議では「核抑止力」をきっぱり否定し、核兵器の禁止を堅持し、その破滅的な結果を回避するための私たち誓約という「政治宣言」を全会一致で採択して大きな成功をおさめました。被爆８０年をも目前にする今、核兵器のない世界、核兵器禁止条約に署名・批准する政府の実現のためにも、より一層草の根の力を強められることが求められます。

今年の意見広告ポスターは、この世界の流れに呼応して、一日も早く核兵器のない世界の実現のため非核日本キャンペーンの成功と非核の政府実現の一助にするため作製します。（(※たかだりゅうじ氏撮影の「原爆の子」「折り鶴」写真使用)

非核の政府を求める大阪の会：事務局長豊島達哉、梅田章二他常任世話人一同

【賛同金】
団体：１口３０００円
個人：１口１０００円
（行政区名・賛同者氏名掲載）

ポスター

締切：１１月末日
郵便振替番号 00970-8-87485
申込先（申込方法）
事務局

【とりくみの紹介】
❖ 非核の会近畿交流会
日時：11月17日（日）
13：30
場所：滋賀県弁護士会館
大会議室

ビッグニュース　日本被団協が
ノーベル平和賞
６８年に及ぶ、訴え続けてきた声、世界を動かす

▲ホワイト議長に署名を渡す和田征子被団協事務局次長（2017.6.16 国連）